

原始・古代・中世の鳴門海峡

福家 清司

はじめに

本稿は鳴門海峡の兩岸地域における、旧石器時代から古墳時代にかけての考古学上の遺跡の分布状況、古代から中世にかけての政治的状況等について概観することによって、当該地域の中世以前の歴史的環境を明らかにすることを目的とする。

1. 原始時代の鳴門海峡

(1) 旧石器時代の遺跡

日本列島に人々の居住痕跡が認められるようになるのは約 30,000 年前から始まる旧石器時代とされる。旧石器時代、人々は巧みに石材を加工した石器を用いて、ナウマン象やオオツノシカなどの大型動物を狩ったり、木の実や魚貝類を採ったりして生活した。

鳴門市域では鳴門町土佐泊浦字土佐泊と撫養町との間に架かる小鳴門橋の橋脚が据えられている鍋島から、サヌカイト製石核・縦長剥片・横長剥片・搔器(または尖頭器)などの旧石器が採集されたことや鳴門海峡の海底からナウマン象やオオツノシカの化石骨がたびたび網に引っ掛かって揚げられることから、旧石器時代人が大型動物を追って当地域に進出していたことがうかがえる(1)。

海峡を挟んだ南あわじ市域においても旧石器時代の遺跡は少ないが、曾根遺跡(北阿万筒井)でサヌカイト製の国府型ナイフが形石器、浦壁池(神代浦壁)でチャート製のナイフ形石器が出土している(2)。

(2) 縄文時代の遺跡

縄文時代になると、鳴門市域では亀浦遺跡が確認されている。当遺跡は鳴門町土佐泊浦字福池において縄文土器を採集したことによって発見されたもので、現時点では発掘調査は行われていない。

このほか、瀬戸町堂浦字大日出所在の鳴門日出遺跡からも縄文土器が出土したとされる。

一方、南あわじ市域では長原遺跡(賀集牛内)・神子曾遺跡(賀集鍛冶屋)・楠谷遺跡(賀集野田)・おのころ島遺跡(榎列下幡多)・九蔵遺跡(阿万東町～阿万西町)・奥河内遺跡(阿万上町)・二本木遺跡(北阿万稻田南)など、多数の遺跡で縄文土器等が確認されている。

(3) 弥生時代の遺跡

弥生時代になると、遺跡数は飛躍的に増加する。

鳴門市域では、鳴門海峡を見下ろす孫崎で弥生土器の散布が認められるほか、鳴門公園からは弥生中期の土器・石器が出土することから、平坦部に集落を営んだ可能性が指摘されている。福池漁港からも縄文土器とともに弥生土器も出土し、引き続き当地付近に集落が営まれたと考えられている。

また、日出湾に面した瀬戸町堂浦字大日出の堂浦網代遺跡からは、弥生時代から古墳時代にかけての土器が出土し、その中に製塩土器が含まれていることから、当地域で製塩が行われていたことが推定されている。

一方、南あわじ市域では志知川沖田南遺跡(松帆志知川沖田南)・井手田遺跡(阿万上町～阿万下町)・九蔵遺跡(阿万東町～阿万西町)などで前期の遺構が検出され、嫁ヶ渚遺跡(賀集立川瀬)では前期末～中期初頭頃の土器・木製品、中期前葉頃と考えられる円形竪穴住居が検出されている。中期になると神子曾遺跡(賀集鍛冶屋)において、島内最大規模規模とされる周溝墓群が検出されている。中期後半以降終末期にかけての遺跡数は数多く、久保ノカチ遺跡(賀集福井)・高萩遺跡(同前)・祢つノ木遺跡(賀集生子)・護国寺東遺跡(賀集八幡南)などが知られている。

なお、淡路島における弥生期の遺物としては青銅器が著名である。とりわけ南あわじ市からは多くの銅鐸が出土している。平成 27 年 4 月、松帆地区から採取された砂土から発見された 7 個の銅鐸は、3 組が入れ子状態で埋まっていたうえ、すべてに舌がついている点でも極めて重要な発見となった。また、松帆古津路の西浦遺跡からは昭和 41 年に合計 14 本の銅剣が出土している。

(4) 古墳の分布

鳴門海峡をはさんだ両岸には古墳が数多く分布することが知られている。特に鳴門市域では、これまでのところ土佐泊浦大毛遺跡(鳴門町土佐泊浦字大毛)・亀浦北山古墳群(鳴門町土佐泊浦字福池)・納言山古墳群(鳴門町土佐泊浦字大毛)・竹島古墳群(鳴門町高島字竹島)・松瀬崎古墳群(鳴門町土佐泊浦字土佐泊)・田ノ浦古墳群(瀬戸町室字田ノ浦)・室古墳群(瀬戸町字在所谷)・阿波井神社裏山古墳群(瀬戸町堂浦字阿波井)・中島田古墳群(瀬戸町中島田字東山)・島向古墳群(瀬戸町北泊字北泊他)・北泊古墳群(瀬戸町北泊字北泊)・日出古墳群(瀬戸町堂浦字日出)など、多数の古墳群が判明するが、いずれもその規模は小さい。

これらの古墳の大半は、鳴門海峡を舞台として漁撈活動に従事した海人集団が築造したものと推定される。ただし、堂浦日出遺跡(瀬戸町堂浦字日出・大日出)・室南方遺跡(瀬戸町室字中ヶ谷)などで当該期の製塩遺跡が検出されていることから、これらの古墳の中には、鳴門海峡の沿岸で製塩を行っていた集団が営んだ古墳も所在したと推定

される。

当該期の遺跡としては以上のほかに、室北方遺跡（瀬戸町室字深ヶ谷）・大島田遺跡（瀬戸町大島田字上傍示）・中島田遺跡（瀬戸町中島田字大畑他）などが知られていることから、古墳時代、とりわけ後期になると多くの人々が鳴門海峡を舞台とした漁撈・製塩活動を行ったことがうかがえる。

一方、南あわじ市域では淡路島の中でも古墳数が多い地域であるが、いずれも後期古墳であり、鳴門海峡に面した地域に多く分布することから、海人を埋葬した古墳と考えられている。このうち、沖ノ島古墳群（阿那賀伊弉沖ノ島）では、発掘調査によって、須恵器のほか、鉄製の釣り針・軽石製の浮子・土錘・蛸壺形土器・棒状石製品などの漁具とみられる遺物が副葬されており、注目される。また、賀集八幡北の西山北古墳は淡路島最大の全長 8m の横穴式石室を持つ古墳で、6 世紀後半に築造された。さらに八木徳野の徳野塚村古墳からは屋根型の蓋と 10 個の脚を持つ身からなる陶棺が出土し、およそ 7 世紀前半頃のものと考えられている。

なお、この時期の遺跡として市新の木戸原遺跡は、滑石製の祭祀具が出土したことから、大和朝廷との関連が推定される祭祀遺跡と推定されている。

2. 古代の鳴門海峡

(1) 南海道

律令制度の下、淡路国、阿波国は、紀伊国・讃岐国・伊予国・土佐国とともに南海道に属し、官道は紀伊国の賀田から淡路国の由良へ渡り、淡路福良から鳴門海峡を船で渡航し阿波国撫養へ渡った。阿波国では石濃駅・郡頭駅を経て、阿讃山地の大坂峠を越えて讃岐国に至った。

(2) 国・郡・郷

鳴門市域は、律令制度下では阿波国板野郡に属した。『和名抄』によると、板野郡には川島・井隈・津屋・高野・小島・田上・山下・松島・全戸・新屋の計 10 郷が所在した。このうち、鳴門市大津町・撫養町木津地域を津屋郷、木津以外の撫養町や里浦町など海岸部を全戸郷とする説が有力であるが、異説もある。

一方、南あわじ市域は、淡路国三原郡に属した。三原郡には倭文・幡多・養宜・榎列・神稻・阿万の各郷があり、このうち鳴門海峡は阿万郷に面したと考えられる。

(3) 「牟夜戸」

「阿波国風土記逸文」（仙覚『万葉集注釈』巻第 2）に「中湖トイフハ、牟夜戸与奥湖中ニアルガ故、中湖ヲ為名」とみえる「牟夜戸」は、現在の撫養町岡崎に所在する岡崎港と推定され、淡路国福良から当地に至ったものであろう。

(4) 平城宮跡出土木簡と鳴門海峡の産物

平城宮跡から出土した木簡(3)の中に、「阿波国進上御贄若海藻壺籠 板野郡牟屋海」と記された木簡がある。これによって撫養の海、すなわち鳴門海峡で産した「若海藻」1籠が「御贄」として奈良の都に送られたことが判明する。この「若海藻」は現在も鳴門地方の特産品として著名なワカメのことであり、はるか古代からワカメが当地方の特産品として知られていたと考えられる。

一方、淡路地域についても、次の2点の木簡が知られている。

A・「淡路国三原郡阿麻郷戸主海部□麻呂戸口同姓嶋麻呂調塩三斗」

・「○○○天平宝字五年十月四日」

B・「淡路国三原郡阿麻郷戸主丹比部足・□同姓蓑麻呂調塩三斗」

・「天平宝字五年」

A・B 木簡とも天平宝字 5(761)年の年号を持ち、淡路国三原郡阿万郷から平城宮に送られた「調塩三斗」に付けられた荷札木簡である。これによって、当時の三原郡阿万郷、すなわち鳴門海峡に面した海岸部で、製塩が盛んにおこなわれていたことがうかがえる。

3. 鎌倉時代の鳴門海峡

(1) 鎌倉幕府の守護

鎌倉幕府開設によって、淡路国・阿波国にも守護が配置された。淡路国・阿波国の最初の守護は同一人で、近江国出身の佐々木経高であった。経高は両国の国府の近辺に守護所を置いて、守護代を派遣して守護としての務めを果たしたと考えられているが、承久の乱に際して、上皇方の中心的な武将として活動し、子高重とともに敗死した。

乱後、淡路国には長沼宗政、阿波国には小笠原長清が新守護に補任され、両氏ともに、鎌倉幕府滅亡時まで、代々守護職を世襲した。

長沼氏の守護所は佐々木氏同様に国府近くに置かれたと推定されている。

一方、阿波国の小笠原氏の守護所については、板野郡井隈荘説や三好郡大西城説がみられるが、必ずしも明確でない。

(2) 荘園と地頭

鎌倉幕府は荘園・郷等ごとに地頭を任命した。鳴門海峡に面した淡路国三原郡内には、貞応 2(1223)年の「淡路国大田文」(4)によると、石清水八幡宮領阿万荘・高野山領福良荘・高野山領賀集荘が所在した。そしてこれらの荘園には、幕府によって、それぞれ地頭が任命された。

一方、中世の板野郡は東西に分割され、鳴門海峡沿いは板東郡に属した。この板東郡内には現在の藍住町の地域に室町院領富吉荘・春日神社領矢上荘(保)・住吉大社領井隈荘、北島町・徳島市応神町・徳島市川内町付近には石清水八幡宮領萱嶋荘、鳴門市大麻町堀江には石清水八幡宮領堀江荘が成立していたが、鳴門海峡に面した地域については、荘園の成立を示す史料に恵まれないため詳細は不明である(5)。

ただ、鳴門市撫養町木津に所在する長谷寺所蔵の過去帳に「泊荘」とみえることから、鳴門海峡に面した海岸線を含む地域の荘園であったと考えることができる。また、人丸影供領讃岐国里海荘を鳴門市里浦町付近とする説もあるが、詳細不詳である。

(3) 高野山僧道範の南海紀行

高野山正智院学僧道範は、仁治4(1243)年に罪に問われて、讃岐国に配流の身となり、京都から淡路経由で讃岐国に送られた(6)。

同年2月6日には、淡路国府から3里程のところにあった「福良泊」に至っている。ここから乗船して鳴門海峡を渡る手筈であったが、折あしく「時々吹雪凄まじく」という状態で、「風悪しく」3日間の足止めとなった。道範はこの間、「沖津風ふくらが磯にひかずへてならぬ浪にぬるゝ袖かな」「行くさきもわが故郷にあらなくに爰を旅とは何急ぐらむ」と流罪の身を嘆きつつ、その心境を和歌に詠んだ。

天候の回復した同月10日、福良から「阿波の戸」を渡って「佐井田」に着いたことを記す。「阿波の戸」とは、古来の「牟夜(ムナ)の戸」のことで、今日でいう鳴門海峡あるいは「鳴門」そのもののことである。「佐井田」は阿波国側上陸地点の「斎田」である。

道範はこの鳴門渡海について「海路三里余、シマシマ入江々々ノ有様、悦目養意」と、鳴門海峡の美しい景観に大いに慰められたことを記している。

その後、道範は陸路阿讃山地のふもとを西に進んで、板東郡大寺で宿泊、11日に大寺を立て、大坂峠を越えて、讃岐国の大塚に至り、12日に讃岐の国府に到着した。

その後、道範は建長元(1249)年5月21日に赦免されたが、病気のために直ちに高野山に帰ることができなかった。ようやく8月7日に白峰を立て、白山の港から乗船し、引田の港に至り、ここから陸路で大坂峠を越えて、阿波に入った。そして今回は木津で乗船して、撫養口に至り、そこから鳴門海峡に漕ぎ出て、福良に渡った。そして福良から賀集まで至って、ここで宿泊し、数日を過ごした。14日になって由良に至り、船で紀伊国加太に渡って、陸路、高野山に帰着した。

以上の高野僧道範の行程は、本州から淡路を経由して、四国阿波・讃岐に至る当時の交通ルートを良く示している。往路の道範が淡路福良で、天候の回復を待つために3日間を要したことは、当時の技術としてはやはり鳴門海峡の渡海が相当困難であったことを示すものであろう。

また、道範は瀬戸内海側の讃岐国を白山から引田まで海路で進んだが、鳴門海峡を目前にして下船し、阿讃山脈の峠道にルートをとっていることは注目に値する。

鳴門の渦潮が巻く鳴門海峡ばかりか、現在の小鳴門海峡であっても、船で通過するのはやはり危険が伴うために、当時は、一般的なルートといえ、古代以来の官道である大坂越であったことを如実に示している。

4. 南北朝・室町時代の鳴門海峡

(1) 室町幕府の守護支配

建武 3(1336)年 2 月、京都での合戦に敗れた足利尊氏は、九州に敗走する途中、室泊で軍議を開き、四国に細川和氏・顕氏を中心とする細川氏一族を配した(7)。このうち、阿波には細川和氏・頼春兄弟らが秋月(現阿波市市場町・土成町)に入って活動。尊氏が九州から京都に攻め上り、室町幕府を開くと、和氏がそのまま阿波国守護に任じられ、秋月が守護所とされた。

なお、秋月の守護所は、15 世紀前半頃までには現在の板野郡藍住町の勝瑞に移転された。

一方、淡路については、建武 3 年 11 月という幕府成立時点において、和氏・頼春の弟である師氏が守護として活動していることが判明することから、師氏が最初の守護に補任されたと考えられている。しかし、幕府成立当初の淡路国内においては、依然として反足利氏勢力が一定の勢力を保持していたとみられ、建武 4 年 8 月頃には、師氏の兄頼春が「淡路国凶徒誅伐」を命じられている。細川氏による淡路国守護職は、師氏の後、その子孫へと世襲され、細川氏庶流の淡路守護家を形成した。その守護所は国府近辺の八木に置かれたと考えられ、現在も一部土塁等の遺構が残る養宜館跡がその居館跡と推定されている。

このように淡路国・阿波国とも室町幕府草創期から細川氏が守護となったが、阿波守護であった頼之が將軍義詮によって、3 代將軍義満の後見人として管領に登用されると、細川氏は頼之に始まる管領家(京兆家)を宗家として、淡路守護家や阿波守護家などの庶流守護家と同族連合体制を形成し、幕府内で最大の勢力を誇るようになった。

(2) 安宅水軍

室町時代、淡路の由良を拠点として、播磨灘・大阪湾・紀伊水道一帯の水域を支配していた水軍領主に安宅氏がいた。安宅氏は淡路・阿波の細川氏の水軍としても活動していたと考えられる。この安宅氏の出自は、同氏の家譜である『安宅一乱記』(8)によると、もともとは阿波小笠原氏で、鎌倉後期頃に紀伊国安宅荘の地頭として当地に移り住み、安宅氏を名乗ったという。その後、水軍領主として成長する中で、拠点を由良に移

したと伝えられる。

鳴門海峡を含めた阿波・淡路、および土佐沿岸の海域は、この安宅氏が実質的に支配したと推定され、次項で述べる由良をはじめとする淡路・阿波などの港津の船舶の活動は、平時の安宅水軍の活動を示すものと考えられる。

(3)『兵庫北関入船納帳』

「兵庫北関入船納帳」(9)は、現在の神戸港付近に置かれていた東大寺所管の海関である「兵庫北関」の入関記録で、現在、文安2(1445)年のほぼ1年間のものが伝わっている。この入関記録には、鳴門海峡に面した阿波国側の港としては「武屋」「土佐泊」、淡路側としては「あなか」がみえる。その記載箇所を示すと、次のとおりである。

「(二月) 三日

あなか 三原六十石 二百卅文 形部三郎 同(二郎三郎)」

「(六月) 廿八日

武屋 小麦六石サヌキ斗 百廿文七月二日 四郎衛門 木屋 」

「(七月) 二日

藍四石

土佐泊 大麦十五石サヌキ斗 二百七十文七月四日 兵衛左衛門 木や
小麦十石 同 」

「(七月) 廿四日

□屋 藍卅石 三百廿文七月廿六文 兵衛左衛門 道祐 」

「(十一月) 廿七日

土佐泊 米八石サヌキ斗 百五十文同日(十二月十二日) 七郎左衛門 木や
〃 米四石 百文同日 同人 」

「(十二月) 廿九日

あなか 米廿二石 二百十五文当日 太郎二郎 木や 」

これによると、「武屋」に船籍を置く船舶が兵庫まで運んだのは小麦・藍、「土佐泊」は藍・大麦・小麦・米、「あなか」は「三原」・米であったことが判明する。この内、「三原」というのは、淡路の三原の地名を冠した商品で、このような呼称の場合は、専ら「塩」であることが確認されるので、これは淡路の三原で産出した「塩」を運んだということの意味すると考えられる。

この塩の運搬も注目に値するが、同時に、「武屋」と「土佐泊」の船が「藍」を積みだしていることも注目される。この藍は、鳴門の海岸地域で生産されたものではなく、

広く吉野川流域で栽培されたものが、この鳴門海峡沿いの港に集積されて、畿内方面に積み出されたものと考えられる。

鳴門海峡に面した重要港湾の撫養が藍の積出港として栄えたのは、江戸時代に入ってからとこれまでは考えられてきたが、そうした役割はさらに古く、少なくとも 15 世紀半ば頃までは確実にさかのぼることがこの史料によって判明する。

なお、鳴門地域で生産された可能性も十分想定される地名指示商品「阿波塩」について、関連情報を列挙すると次のとおりである。

「アワ塩」関係記載一覧

月	日	船籍地	積載品・数量	関銭	船頭	問丸
1	19	由良	アワ塩 90 石	200 文	衛門	木や
3	6	地下	アワ塩 165 石	340 文	島本次郎	
5	3	地下	アワ塩 55 石	175 文	北浜二郎五郎	
5	21	地下	アワ塩 25 石	100 文	衛門五郎	
10	20	由良	阿波塩 110 石	200 文	馬二郎	木や
12	1	由良	阿波塩 100 石		馬太郎	

「地下」は兵庫北関の地元を意味するもので、兵庫津のこと、「由良」は安宅氏の拠点である淡路由良のこと。これによると、「阿波塩」は阿波国の港津に船籍を置く船は「阿波塩」運送からは疎外され、専ら「地下」船・「由良」船が従事したことが判明する。

(4) 『兵庫北関雑船納帳』

また、兵庫北関については、別に、枝船と称された小舟による運送実態を示す記録である「兵庫北関雑船納帳」(10)が伝えられているが、これによると、撫養の港が「右や」「ムヤ」の表記でみえるほか、小鳴門海峡の北側の出入り口に位置する「北泊(北留、北トマリ)」が記載される。「右や」「北泊」とともに、当時のエネルギー源であった薪を兵庫に運んだ「木船」の船籍地であったことが知られる。

なお、同史料には、「木津」が多数記載される。当港について今谷明氏は大阪市の木津に比定するが、筆者は薪の生産地との関係で、阿波国の木津に比定するのが妥当との立場をとる。筆者の比定が正しいとすると、当時、阿讃山地が畿内方面の重要なエネルギー(薪)供給基地の一つとなっていて、多数の薪船が所属していたことが判明する讃岐引田や阿波木津など鳴門海峡近辺の港津がその積出港して特に重要な役割を担ったと考えることができる。

(5) 「阿波州鳴門浦大將軍」

15 世紀後半頃の阿波国の数少ない史料として、1471(成宗 29)年に朝鮮半島で作成された『海東諸国紀』(11)という書物がある。これによると、当時の阿波国には「水田 3414 町 5 段」があったと記される。これは室町時代の記録である『拾芥抄』(12)に阿波国の水田が 5245 町と記されているのに比較すると、きわめて少なく、むしろ平安時代の実態を伝える『和名抄』(13)記載の数字に近い。ところがこの書物には、「阿波州鳴門浦大將軍」を名乗る「源朝臣義直」が「戊子年」(1468 年か)に使者を使わしたことが記されている。この源義直については詳細不明ながら、阿波鳴門を中心として活動した水軍勢力であると考え、由良の安宅氏一族であった可能性が高い。

(6) 室町時代の交通路と鳴門海峡

明応 2(1493)年 11 月 19 日に聖護院門跡道興准后が備前児島から讃岐国引田に渡海し、ここで阿波国勝瑞に滞在していた細川成之の迎えを受け、その年は勝瑞で越年したことが近衛政家の日記『後法興院記』(14)にみえる。ここで道興がたどったルートは、備前児島で乗船、島々が点在する備讃瀬戸を抜けて、播磨灘に入り、鳴門海峡を目前にして、讃岐の引田港に着岸・上陸し、そのまま古くからの官道をたどって阿讃山地の峠である大坂峠を越えて、阿波国に入り、吉野川沿いに東に下って、成之の館のある勝瑞に至ったものと考えられる。

こうしたルートで注目されるのは、やはり船で鳴門海峡を通過することは避け、引田から陸路、勝瑞を目指した点である。このことは一つにはやはり鳴門海峡を船で通過することが困難であったこと、二つには古代以来の官道である大坂越えが十分整備された陸路として広く利用されていたこと、を示すものであると考えられる。

5. 戦国時代の鳴門海峡

(1) 三好氏の台頭

三好氏は阿波国三好郡内の長講堂領三好郷を本貫地として、在名を名乗った氏族で、本姓は小笠原氏であったとされている。室町中期頃までには、細川氏被官として頭角を現し、成之の時には、在京した守護の側近として活動する「三吉」氏の存在を認めることができる(15)。

そうした三好氏が一躍歴史の表舞台に登場することになったのは、阿波守護家から、細川宗家の京兆家政元の養子となった澄元(成之の孫)の後見人として、三好之長が上洛、京兆家被官となって以降のことである。しかし、その一方で、政元は前太政大臣九条政基の子澄之を養子に迎えていたことから、澄之を家督に据えようとした香西元長は、永正 4(1507)年 6 月に政元を暗殺し、澄元・之長を急襲し、近江に敗走させた。永正のクーデターといわれるこの事件以後、幕府内で権勢を誇った細川京兆家も、「両細川の乱」

と呼ばれる家督争いが発生し、衰退した。

この「両細川氏の乱」の過程の中で、之長・元長(之長の孫)・長慶(元長の子)の3代にわたって畿内地方で活動した三好氏が次第に権勢を強めることになった。そうした三好氏の活動は、本国である阿波や早くに三好氏が勢力を伸ばした淡路、さらには京兆家の分国であった讃岐などを勢力基盤として進められたものであった。特に、三好長慶の実弟冬康が淡路の水軍領主安宅氏に養子として入ることで、三好氏は強大な水軍勢力を配下に納めた。

一方、阿波においても長慶の実弟実休が、天文 22(1553)年 6 月に阿波守護細川持隆を討ち、阿波国を実質的に支配するに至った。実休は、安宅氏と同様に、実弟が養子として入った讃岐の名族十河氏が勢力を持っていた讃岐東部と安宅氏が勢力を持っていた淡路を統治したが、永禄 3(1560)年 11 月に長慶の命を受けて河内国高屋城に移り、その留守は重臣篠原長房が守った。

ところで、三好氏の執事として撫養氏が史料に登場するが、この撫養氏は鳴門海峡に面した撫養を本拠地とする国人であったと考えられる。この撫養氏の一族である撫養隠岐守の後家に「阿子女」という女性がいたが、天文 16(1547)年 12 月 21 日付けの「賦引付」によると、この阿子女が当時、三好一族や細川氏一族、その被官や町人を相手として金融業を営んだ人物であったことが判明する。このことは撫養氏が撫養を拠点とした廻船業をはじめとするさまざまな商業活動によって獲得した資金を元手に金融業にも進出した氏族であったことを示している。

以上のことから、戦国期の鳴門海峡地域の政治的状況は、ほぼ三好氏の支配下にあったと考えることができる。

(2) 長宗我部元親と鳴門地域

畿内の三好政権も長慶没後は急速に崩壊し、永禄 11(1568)年 9 月に織田信長が足利義昭を奉じて上洛してからは、畿内とその周辺地域の政治状況は信長を中心として展開する。四国の統一を目指した長宗我部元親は妻が石谷家の出であった縁によって、斎藤利三・石谷頼辰兄弟が仕えた明智光秀を取次として織田信長と結びつき、信長の承認のもとに阿波国などへの侵攻に着手した(16)。

天正 9 年 5 月頃までは信長と元親との同盟関係は順調であったが、同年 6 月頃に信長が阿波・讃岐方面の平定に三好康長を起用した。康長は阿波出身の武将であり、また阿波三好氏の一族でもあった。こうした人物の起用は信長が、長宗我部元親による全面的な四国統一とその領有に対し、承認の意思がないことを示すものであったが、果たして信長は天正 9 年 11 月に、羽柴秀吉と池田恒興に命じて、淡路国岩屋城を落とし、淡路国を支配下に収めると、三好康長に阿波・讃岐の平定を命じたのであった。そして阿波

・讃岐を差し出すことを断った元親を討つために、四国への出兵を命じた。

天正 10 年 6 月には信長自身が四国へ出陣することが決まり、先陣として三好康長が送り込まれたが、信長の出陣前夜の 6 月 2 日に本能寺の変が勃発。信長の突然の訃報を聞き、康長も急遽撤退した。この有名な本能寺の変の背景には、信長の四国政策の転換に伴う明智光秀の苦悩があったとする見解も有力である。

いずれにせよ信長と元親との決戦は回避され、元親は同年 8 月 28 日の中富川の合戦に大勝し、阿波をほぼ手中にすることになった。

ただし、三好氏の水軍の一角を占めた森氏が拠った土佐泊城のみは元親に屈しなかった。このことが後に秀吉の四国出兵の際に、本隊が淡路から鳴門海峡を通過して阿波に入る切っ掛けとなったと考えられる。

(3) 羽柴秀吉の四国出兵と鳴門地域

本能寺の変後、織田方は後継者争いが激化したが、やがて羽柴秀吉がその後継者争いを制した。四国内の一部を除いて大部分を支配下においた長宗我部元親はできるだけ有利な条件で、秀吉と和睦を結ぼうと腐心するが、秀吉は長宗我部氏をもととの本国である土佐一国に封じ込める方針であったため、元親は容易にこうした方針に従うことはできなかった。

そのため、秀吉は弟秀長を総大将とする先陣を天正 13(1585)年 6 月 25 日から四国に向けて渡海させた。秀吉の四国出兵は淡路経由で阿波、備前方面から讃岐、安芸方面から伊予と、三方面から同時に侵攻するという大がかりなものであった。総大将秀長率いる軍勢は淡路から鳴門海峡を渡海し、阿波土佐泊城に入り、目前の木津城を攻略。木津城は東条閑之兵衛が守ったが、東条氏は猛攻にささえきれず、城を明け渡して土佐に退いた。その後も秀長軍は一宮・脇城など長宗我部軍の拠点を猛攻し、讃岐・伊予の戦線でも長宗我部軍を追い詰めていた。そうした中、四国渡海から約 1 か月後の 7 月下旬、元親は重臣の説得に応じて土佐一国の安堵を条件として降伏することになった。

秀吉はこの元親の降伏を受けて、淡路・四国の國分を行い、淡路国については脇坂安治と加藤嘉明に与え、地元の野口孫五郎を蜂須賀家政の与力として取り立て、阿波国については蜂須賀家政に与えられた。

注

- (1) 鳴門市域の遺跡については、同市教委刊行の文化財調査報告書に拠った。以下、同じ。
- (2) 南あわじ市域の遺跡については、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所年報及び兵庫県教育委員会発行の発掘調査報告書、南あわじ市教育委員会発行の文化財調査報告書・年報及び埋蔵文化財事務所ホームページ所収の文化財情報に拠った。以下、同じ。

- (3) 奈良文化財研究所「木簡データベース」に拠った。
- (4) 皆川家文書(竹内理三編『鎌倉遺文』東京堂出版所収)
- (5) 以上の荘園の初見史料等については、拙稿「阿波国中世所領研究ノート」(四国中世史研究会『四国中世史研究』創刊号、1990年)参照。
- (6) この時の紀行文・日記が『南海流浪記』で、『群書類従』第18輯に収載される。以下の記述は同記に拠った。
- (7) 本項の細川氏関係の記述については若松和三郎『細川氏の研究』(戎光祥出版、2000年)参照。
- (8) 長谷克久『安宅一乱記』名著出版、1976年。
- (9) 文安2・3年「兵庫北関入船納帳」東大寺文書、燈心文庫所蔵。
- (10) 文安元・2年「兵庫北関雑船納帳」東大寺図書館所蔵。
- (11) 申叔舟『海東諸国紀』1471年(国立国会図書館デジタルコレクションー海東諸国紀ーに拠った)。
- (12) ここでは国立国会図書館デジタルコレクションー拾芥抄第3巻ーに拠った。
- (13) ここでは国立国会図書館デジタルコレクションー和名抄全20巻ーに拠った。
- (14) ここでは国立国会図書館デジタルコレクションー後法興院記第3巻ーに拠った。
- (15) 以下の三好氏に関する記述は、天野忠幸『三好長慶』(ミネルヴァ書房、2014年)に依拠した。
- (16) 以下の長宗我部元親の阿波侵攻、織田信長・羽柴秀吉の四国出兵関係の記述は、主に平井上総『長宗我部元親・盛親』(ミネルヴァ書房、2016年)に依拠した。

参考文献

若松和三郎	2000年	『細川氏の研究』	戎光祥出版
長谷克久	1976年	『安宅一乱記』	名著出版
林屋辰三郎編	1981年	『兵庫北関入船納帳』	中央公論美術出版
天野忠幸	2014年	『三好長慶』	ミネルヴァ書房
平井上総	2016年	『長宗我部元親・盛親』	ミネルヴァ書房

(徳島県埋蔵文化財センター)